宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話　神湊　代表26番
定価一年送料共　500円

斎館並勅使館建設工事に着手

―造園工事も順調に進捗―

既報の通り、昨年来、神社前面に祈願殿並に大駐車場が完成し、早速、同殿に於て交通安全祈願祭をはじめ一般私祭が執り行われ、参拝車輛も約五百台駐車可能の大駐車場に総て収容することになり当社永年の念願であった車輛の境内乗入禁止も、ここに漸くその実現を見るに至った。これにより、愈々待望の境内の復興工事が着手可能となり、正月明けを待って一連の諸工事が一斉に開始された。大復興計画に基づいて今後施工される工事の概況は次の通りである。

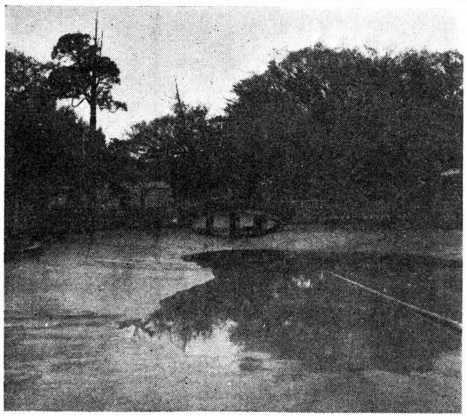
先づ、神門に向って左側の旧茶店跡に、勅使館が新築される。建坪百坪、総桧造り純和風の建物である。文字通り勅使御参向の折の饗応の室として使用されるものである。次にこの勅使館に対応し、神門に向って右側、祈願殿と清明殿を結ぶ形で斎館が建設される。建坪三五〇坪、総桧造り、屋根は濃緑色のカラーベスト葺、日本建築の建物である。この建物は、神職の参籠、潔斎の場であり、祭典時には、ここで着装し、列を整えて拝殿に参進する。建物内は、二十畳から八畳まで大小の和室が十数部屋設けられ、その他、応接室、宮司室、潔斎場、食堂、炊事場等があり、祈願殿裏の出入口と渡廊下で通じ、所謂社務所としての機能を祈願殿、斎館両者一体となって更に有効的に発揮するよう設計されている。また、斎館は馬場道を跨ぐ形で渡廊下により清明殿の結婚式場とも通じ、結婚式の折は参列者控室としても利用出来るようになっている。次に神門前正面参道に左右対称に、祓所、手水舎が建立される。どちらも建坪十五坪、桧造り銅板葺、吹き抜けの建物である。右側の祓所は、神職が拝殿に参進するに先立ち、祓いを行う場所である。一方の手水舎は、既報の通り八幡宗像会奉納の手水石をこの場所に据え付け、この上に上屋をかけるものであるが、二十数屯の見事な自然石に相応しく、完成時には神門の大きさにほゞ匹適する程の壮麗な手水舎が、そしてこれと同型の祓所が参道をへだてて相並び、境内に一段と重厚さを添える。次で、正面透塀六十間が総て新しく建て替えられる。現在の朱塗りの塀から、白木造り、銅板葺きの透塀に変わる。この他、神饌所、清明殿、末社周辺の透塀の修築が行われるが、中でも神饌所は既に一六〇年程の年月を経て、当社にとっては文化財的価値を有する建物であるから、慎重な修復施工が行われている。

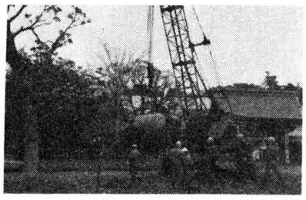
以上の諸施設の建設工事に併行し、愈々待望の心字池工事が開始された。従来残されていた池の約二倍六百坪の広さに亘り浚渫、底張りをしようというもので、約四百年の間堆積したヘドロを、トラック百数十台分排出し、その跡に砂を埋め、その上を二十糎の厚さのコンクリートで塗り固め、この程、漸く深さ約一米の池が出来上った。この後、池の縁を自然石で囲み、築山、植樹により日本庭園風に造園し、常時清水を池に引き今秋には数千匹の錦鯉を放つ予定であり、完成の暁には参拝者の目を楽しませることであろう。

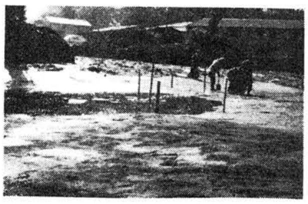
また、正面参道及び、斎館、勅使館を結ぶ参道には、縦三尺、横二尺の御影石六百枚が敷きつめられるが、現在境内の一隅で、石の加工が、四、五名の石工により休みなく進められている。更に、勅使館、斎館周辺の庭造り、境内の排水工事、高宮参道の砂利敷き等がなされている。

以上の建設、造園の諸工事は、今夏までの完成を目指して正に急ピッチで進められているので、境内は全く雑然として足の踏み場もない状態であり、参拝者の皆様には御迷惑を御掛けしているが、御復興完成迄今暫らくの御辛抱をお願いする次第である。

写真は（上）コンクリート固めが終った心字池。（中）手水石据付け模様。（下）工事中の心字池。







神具、装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
九州店　福岡市吉塚二丁目三番二号（〒八一二）
電話福岡（〇九二）六五一ー九四五六番
本社　京都市京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四一ー三三四一（代）～四番
三五一ー一三三四・六〇六六番

論説

宗像が生んだ偉材

倉田主税先生を偲ぶ（二）

宗像は千数百年に及ぶ長い神郡の歴史と天恵の風土とが、他郷に見られない淳風美俗を培ってきた。先生の出生地神興村は、その名の示す通り、敬神崇祖の気風が最も強く伝承されてきた。まして村一番の旧家の庭訓は、厳格なものであったであろう。秀れた素質に適切な家庭環境、温厚で几帳面な性格に勉学への努力を加えて、小学校から高等工業まで、優等生特待生の抜群の成績であったことは当然とも肯かれる。高等小学校は出光佐三先生も学ばれた東郷であったが、三年くらい後の在校で顔は合っていなかったと聞く。その頃の話は、当時の学友であった郷土の先輩諸氏が懐しく語られている。

長年日立の事業を通じて、先生と御関係の深かった方々、或は私的の御親交で先生をよく知る方々も多数おられるから、御生前のあれこれに詳しく追慕の筆を執られることと思うので、吾人は宗像人たる先生の一面を述べてみたい。

吾人が先生に親しくお目にかかる機会は少かった。去る昭和三十八年沖津宮の上代神宝約二万一千点が、国宝または重要文化財の指定をうけて宝物館の建設が計画され、郷土関係者にも浄財を仰ぐことになった時、日立本社に先生をお訪ねした。多額の寄進を快諾され、種々意見を述べられた。

子供の頃から氏神たる宗像大社の尊貴な御神格を教えられて育ち、今回多量の祭祀遺品が出現して、わが民族の祖先の厳粛な崇敬心がうかがわれる。神郡宗像に生を享けたことを、この時勢なればこそなお更嬉しく思っている、との御主旨の話であった。種々の不便もあったろうに、本籍は決して東京に移されず、神郡宗像人たる氏子意識は、生涯を通じて離れることはなかったのである。

終戦後の精神的迷妄困惑を嘆かれ、早くから紀元節の復活を強く念願されて、年賀状に代えて毎年のように寒中見舞の形で二月十一日を提唱されていた。この日が復活して建国記念日として、陽の目を見たことに古武士の風格と愛国の気骨溢れる先生は、満足の笑を浮べられたであろう。

昨年四月、先生は在京の福岡県出身財界人の集いである東京宝満会の会員十数名の御一行に加わられて、宗像大社に参拝されたのである。いずれも知名の方々ばかりであるが、その時先生に御挨拶申し上げたのが、最後の機会となった。壮者を凌ぐお元気とお見うけしたのに。

教育郡宗像は、名物の宗像教員を輩出してきたのであるが、先生もまた教壇に立たぬ教育者であったと言えよう。事業上の技術指導や企画経営は、まことに信念に充ちた指導者であった。誠実な教育者であった。大日立への戦後のめざましい発展は、この教育者この指導者が常に先頭に起ち、障碍に挫けず難路を恐れず所信を貫かれて、達成結実を見たものと想察する。

倉田先生は、今日なお日立製作所の事業の中に生きておられる。先生の精神が後続の人々によって追慕伝承される限り、大日立の躍進は、華々しく進展して止まる日はないであろう。

神域の一隅にあって、静かに在りし日の先生を偲び、御冥福を祈って粗筆をおく。

倉田先生略譜

明治二十二年三月一日　宗像郡神興村に倉田主米造の長男として出生
明治三十六年三月　東郷尋常高等小学校卒業
明治三十七年四月　福岡県立小倉工業学校入学
明治四十一年三月　右卒業
明治四十二年四月　仙台高等工業学校機械科入学
明治四十五年三月　右卒業
同年四月　株式会社久原鉱業入社
大正元年十二月　下関重砲第五連隊入営、翌二年十一月除隊
大正七年二月　日立製作所入社
昭和二年四月　欧米視察出発、同年十月帰国
昭和十六年十月　取締役就任
昭和二十二年三月　社長就任、同年四月　取締役会長兼任
昭和二十八年十一月　日立造船株式会社取締役及び日立工機株式会社会長兼任
昭和三十六年十一月　社長辞任、取締役会長専念
昭和四十四年十二月二十五日　脳出血のため永眠、翌二十六日付従三位勲一等瑞宝章追賜

＜御案内＞

NHK総合テレビで　孤島沖ノ島　〝海原の遺跡〟　放送さる

玄界の孤島沖ノ島で現在祭祀遺跡の調査が行われ、数々の祭祀遺物が発見されている。中でも唐三彩、奈良三彩は、その代表的なもので、日本の歴史を解明する上に貴重な宝物とされている。

神秘の島として今や世界の注目を集めている〝沖ノ島〟が、NHKによって、左記の日時に放送されますのでお知らせ致します。

記

放送　NHK全国放送
日時　三月二十一日　日曜日
第一回　同日午后三時半　～四時まで
第二回　同日午后十一時二十分　～十一時五十分
題名　孤島沖ノ島　〝海原の遺跡〟

阿蒙少言

箱根山かごに乗る人、かつぐ人そのまたわらじを作る人、と古い俚諺が世の中すべて持ちつ持たれつを、諷刺している。休日を楽しみ車を走らせる客、これを運転する従業員、その賄をする裏方、と現代にも古い箱根山は同様。車に乗る客も休日以外に、どんなに辛労しているか、運転する者もその裏方も、客の働いている時に休養娯楽がある。一時の情景だけで贅沢と苦労は、枠にはめた考え方は出来ぬ　○売家と唐様で書く三代目、江戸の皮肉な文句は現代も型通りの三代目を見ること少くない。祖父の創業やそれを継いだ父の経営、その苦労を知らずに育った坊ちゃんでは城明け渡しの末路もありがち。ここに可愛いあまりに訓練を欠いた世間知らずの坊ちゃんを演じさせた親の失敗が見出される　○郷里から一円の送金もなくて、東都の名門校に学ぶ子弟もある。勉学とアルバイト奨学金、艱難汝を玉にするは現代も通用する警句である「お母さん着物を買って送りたい、無理な仕事はしないで」と母への便りを聞かされて感銘。孝子は貧しくとも、性根と努力で成績も秀れ、有能な社会人となる　○果報は寝て待て、では、まかぬ種ははえぬ、と答えが出るのが当然。ある駅で「異常時列車取扱訓練」の模様を見たことがある。早朝の寒気も物かは、上司の厳しい指揮、構内を駆けて忠実に連絡処置、世界一を誇る鉄道運行のかげに、この責任感と習得熱が生きている。そこにはスト妄動の労組はない　○転ばぬ先の杖、失敗は成功のもと、古諺の心が今日の経済国家への発展を教えている。はき損った自由権利では、自他の幸福はやって来ない。○太陽は黙っていても昇る。春は招かずとも自ら訪れる。働くことが人間のあたりまえと悟れば、棚からのぼた餅を待つ非良識は介在しない。（白雲）

第二七回　宗像大社歌会詠草

毎月十五日〆切　詠草到着順

福岡　桜井ツ子
後の急ぐ大根を引き冬菜ひきて汗すれば寒の茜がにほふ

田熊　鷺津かつ代
紀のくにの大海原に対ひゐてはかなきものかわがかなしみは

田久　小方実
ほろ〳〵と山鳩のなく声きこゆ寒椿咲く森の日向に

吉武　白木うめの
軸のなき歯車の如農の道定まらずして年は明けたり

名残　竹原圓
夜行車のなかで辞典をくりており孫の名付けの日が近まりて

田熊　小野角次郎
梅の宮茶店連り客を呼ぶ鶯目白春を囀る

田熊　小野かをる
朝明けを積もれる雪に驚きぬ暖冬に慣れ年を越し来て

武丸　原田リノ
思ひ出さむ記しと木に挟みをくオーツク海のハマナスの花

福間　森八蔵
世は古りて郷土の史跡調ぶれば涙こぼるゝ事ぞ知るかな

曲　天野トモヱ
初詣達磨の店のにぎわしく求めし一つに五円入れおく

大井　安部静子
いで湯にて背撫りくれし行きずりの心なごみしその人の面

田久　立花勇雄
神苑の朝清しく今日も亦奉仕作業の植樹しており

田島　吉武武雄
湯の街はあしだの音もとだえしてよさこい節のかすかきこえて

深田　中野節子
本堂の前のみ明るく日の射して大き鈴の緒遠くより見ゆ

大井　安部重郎
冬の陽に赤き実をつけ梅もどき野鳥の来りついばむも楽し

津屋崎　麦野時雄
冬の海鉄杭立てて網を張り引汐毎にのりをすなどる

徳重　石松やす子
床の間の投げ入れに咲きし白玉の椿を賞して友は帰りぬ

福岡　麻生初栄
手作りの菓子を送りぬ仕送りの思うにまかせぬ子にわびこめて

東郷　藤崎辰子
菊を焼く煙の末に舞う鳩の次第に遠く群を崩さず

戸畑　藤井孝子
浮雲に想いぞよせて彼方なるいとしき吾子に流れ止どめや

宮田　北原君子
渓谷の流れ求めて登り来し岩の一角に不動明王立つ

津屋崎　占部由久
毛糸もて娘が編みくれし膝かけをかくれば雪の降る日も暖かく

宮田　片山朔子
難聴となりたると云う姑我に頷きくるる優し口寄せ

武丸　立石ろせ乃
儲からぬ仕事に日日を費やして楽しみながら夫は老いゆく

津屋崎　永島文子
臨海の小窓開きて朝夕を心かたむけ海のこえきく

宗像　中村幸
暁の空深く見し星影の淡くなりたるを月の側に見つ

福岡　江崎琴子
寒に堪へ身じろぎもせぬ鯉の上につれなくも降る春の淡雪

戸畑　田中ハツセ
石路の黄の花のみが咲きてをり年始に越ゆる古里の丘

門司　永島哲夫
しばらくは温泉にでもゆきて背を伸せと附添おへし吾に云う嫁

大井　木原ふさ子
薄紅の梅ほころびし縁先に子は高々と九々を覚ゆる

大井　吉田ますみ
冬庭のまひるひそけし寒椿紅濃ゆく咲きつゞきつつ

遠賀　長畑房江
森も山も見えなくけさは霧深し窓外はただ茫々として

久留米　篠田太郎坊
小康を得て看病（ミトリ）の暇にバス待てば睦月の木影も膨らみて見ゆ

田熊　岡部緑陽
早春の山里包む朝霧を神の御愛の真綿にも見る

吉武　原田まつよ
酒造家のけむりをはかぬ煙突のさびしき影を月は照せり

原町　八波五月
初入の孫を迎うるこの朝は心はづみて鯛求め来る

江口　辻野平
煙草盆じっと見つめて子も母も涙流しぬ盗みをくいて

節分祭古式豊かに

"豆まきにやんやの賑い"

雪がちらつき肌寒い二月三日午前十一時から、新祈願殿において節分祭が盛大に斎行された。

当社では本年から本格的に厄祓いの祈願祭を斎行することになり、特に厄年にあたるドライバーたちの安全を祈って行われた。

当日は玄海町田島、神湊幼稚園児百余名のほか氏子会や特別崇敬者、交通関係者等多数が祭典に参列し、節分祭は大変な賑わいを見せた。

恒例祭は全て本殿で行われていたが、現在本殿の修復工事中に就き、この節分祭も昨年十二月に完成したばかりの新祈願殿で古式豊かに斎行された。

祭典に引続き祈願殿前において古式さながらの鳴弦の儀式が行われた。

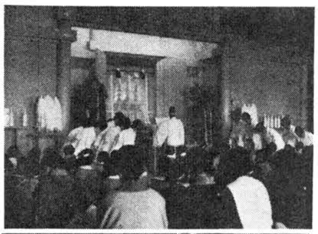
鳴弦は悪魔退散の行事としてわが国では古くから行われていた行事で、表鬼門（東北）、裏鬼門（南西）から入り来る悪魔を祓う意味の行事で、弓に矢をつがえた二名の神職によって行われた。

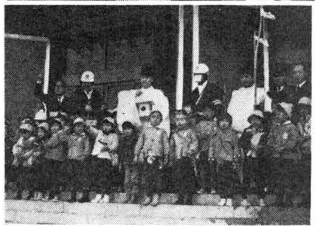
同儀式の後引続き同所に於いて、参列者を始め幼稚園児たちが元気一ぱい「オニは外、福は内」と、寒さを吹き飛ばすように大声を出して豆まきを行った。

祈願殿広場は前夜から降りつづいた雪がまだとけやらず、真白く積った雪をめがけて沢山の豆が投げつけられた。

折しも広場には交通安全、厄祓いの祈願者がつめかけ、年男、年女のまく福豆をひろって賑わった。その後、幼稚園児に対して宗像警察署交通課員二名の白バイによる交通指導が行われた。寒風吹きつける広場で幼稚園児達は警察署員のさしずにしたがって元気一ぱい手を上げ、右、左の確認、五人一組になって往断歩道の渡り方の練習をくり返し続けていた。

子供の歓声が空にこだまして宗像に春来たるを思わせる一日であった。





写真上は、新祈願殿で多数参列のもと厳粛に斎行された節分祭々典模様。

写真下は、幼稚園児とともに行なわれた和やかな豆まき神事模様。

宗像史談　宗像義軍河津党（五）

郷土に遺る記録をたどって義軍河津党の顚末を述べてきたが、これにまつわる巷説秘聞なども、管見の及ばぬ資料に採るべきものがなお少くなかろう。繁雑を避けて解説註記を省略したので、ここに補足として記録の一部を抄録することにした。

河津隆家の曽祖父弘業より四代の間、大内家の目代を勤めて信頼厚く、大内定紋の直垂を与えられたり諱の一字を賜わったりしたのであるから、大内の譜代以上の一族なみに処遇されたものである。

目代とは元来王朝時代の地方長官の代官で、多くは国守の代官職を称したのであるが、私的に置いた支配人の役柄で公授の官ではない中古、地方政治が乱れて国守は自ら任地に赴かず、家人を派遣して現地の政務を執らせる慣行があった。大神宮雑事記に、宝亀四年志摩守目代三河介伴良雄とあるのが、記録に見えるはじめである。

なお朝野群載、吾妻鏡、今昔物語などから抄記すると、鎌倉時代になって目代が現地で強い勢力を持つに至り、殊に武士で源頼朝の推挙で目代となった者は横暴を極めた例が少くないようである。代を経るにつれて、政務を怠り賄賂を集め、中には無能で名ばかりの傀儡も出て目代に目代が附く混乱地方もあった。土賊の蜂起や百姓の暴動など下剋上の風潮の素地が、その辺にあったと考える。

天文二十年大内家滅亡の後は、河津一族は毛利家に属し、毛利の部将小早川隆景・吉川元春の率いる軍勢が、海陸から大友立花連合軍を攻めた時、隆家奮戦して敵味方を驚嘆させるほどの武功を立てた。次は毛利元就が与えた感状、

去十八日於大友勢所々相働候刻紛骨之次第感入令祝着候尚平均之上本領等之儀沙汰候条可被御精出事肝要候也

五月廿一日　毛利元就

河津掃部二殿

この日付は永禄十二年と記録されている。

翌十三年十一月には、毛利勢が撤収して宗像党は孤立し、大友立花連合軍は蔦ケ岳本城に攻め寄せた。ここに河津党の救援めざましく、次は氏貞の感謝の一書、

今度大友勢御計策ニ而引退候則無二の覚悟顕然剰傾御入城候定之一段喜悦之至本望候委細越中守以可申謝恐々謹言　氏貞

河津殿御陣所

この時の河津の援軍によって宗像党は危機を脱したのであるが、その義軍を後に裏切って隆家主従五人を殺害し、氏貞が立花から貰った嬉しくない感状、

今度河津掃部助進退之儀被成御下知候処潔被加誅伐彼衆中迄一通承候条則達上聞候年来雖一致候被応貴命被顕御心底候事神妙而直可被可御感之条期其砌不詳候恐々謹言

正月十五日　臼杵越中守鑑速判

吉弘伊豫守鑑理判

戸次伯耆守鑑連判

宗像大宮司殿

前述のようにこの事件は、元亀元年正月のことであった。隆家と共に非命に斃れた従者は、西田主水・塩川主馬・平井三十郎・和田兵馬の四人で河津党の中でも百戦練磨の勇士である。妙湛寺に五人の遺体を葬り、手厚い供養をしたと伝えるが、無念の怨霊は安らかに地蔵堂に眠れない。大宮司家滅亡がその罪業の応報と見られても仕方があるまい。

大宮司家滅亡の後、小早川隆景に随身した隆家の子氏澄が、文禄元年碧蹄館の戦でよく奮闘し偉功を立てた時、隆景から与えられた感状を序ながら次に挙げておこう。

去る廿六日碧蹄館大明軍接戦自身先駆李如松為宗者八人討取剰本陣切崩援勝利其人体事近来未聞高名喜悦候感状者軍忠到来之時可進候先以感悦之趣馳走候也

正月廿七日　隆景

河津殿

武勇の父子ともに智略にも秀でていたに違いない。この父にしてこの子ありの感が深い。

河津党の宿敵立花道雪は、戸次丹後守鑑連が入道して後の名である。粕屋郡立花山の城主で、高橋紹運の長子千熊丸を嗣子とした。これが後の左近将監宗茂である。筑前藩主となった隆景は、立花氏が柳川藩主に封ぜられた後の立花城に家臣浦兵部宗勝を置いていたが、この城は慶長五年黒田長政が筑前藩主となって入国してから崩してしまった。蔦ケ岳と同様に、今は古城をしのぶ跡形をとどめていない。（了）

宗像大社奨学生選定会議開かる

去る二月九日、昭和四十六年度宗像大社奨学金受給生の選定会議が大社斎館応接室で行われた。

この奨学金制度は、昭和三十四年皇太子殿下御成婚を記念して始められたもので、今回で十二回めをむかえる。

当日は郡内六中学校（玄海、大島、津屋崎、城山、福間、中央）の各学校長にお集り願い、当社からは久保宮司、宇都宮祢宜、升谷権祢宜が出席し、会議が行われた。

久保宮司の挨拶に続き、宇都宮祢宜より本年度の支給額（一人一年間一万八千円）並に支給人員（各中学校より二名計十二名）について事務的な説明があった。

この奨学金支給生の対象は、郡内六中学の高校及びこれと同等以上の学校に進学する者で、発足より今日までの経過を顧みれば次の通りである。

先ず昭和三十五年より三十九年までは各校より毎年一名の奨学生で年間一万二千円の奨学金を支給した。昭和四十年には人員を倍増して十二名に対し同額を支給した。亦、その後物価上昇のため昭和四十一年度より受給生には年額一万八千円を支給することとなり現在に至って居る。

本年の会議に於いても物価の上昇にともなう増額、又支給額の多寡は問題ではない、神恩を受ける奨学生の増員をとの希望等、種々意見が交わされた。

目下、大社に於ては御承知の通り近年未曽有の大復興工事が行われ、広く全国よりその浄財を御寄附願って居る次第であるので、復興工事完了の暁には前記諸問題を改正し、御希望に添うよう当局に於いて考慮している。

この育英事業を継続し益々拡大するには、大社崇敬者各位が誠心からなる浄財を奨学基金にお寄せ下さるよう当紙上をかり、お願いする次第であります。

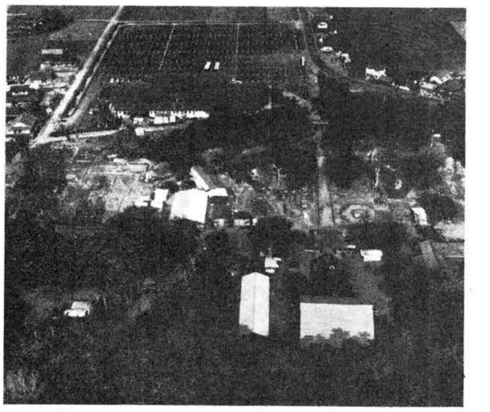
八幡宗像会　新年総会開かる

八幡宗像会新年総会は去る二月七日の午後二時より、北九州市小倉区堺町の北京飯店にて開催された。

会員約六十余名が定刻に参集、開会の辞に続いて、今年喜寿及び還暦を迎えられた会員に長寿を祝して記念品が贈呈された。次いで新入会員十八余の紹介、本年度の会計監査報告について、宗像大社復興事業に協賛して辺津宮神門前に奉納された手水石についての工事進行報告が行われた。手水石は昨年六月当社境内に運搬、昨年末より手水石の加工がなされ、二月十日前後に神門前に据付けられる予定であったのだが、予定地が旧心字池の埋立地であったため土地が軟弱で沈み込む恐れがあり、地盤の固めを行い、三月初めに据付が行われる予定になっている。

ついで岡崎春雄会長からユーモアある挨拶がなされ、当社久保輝雄宮司から復興事業の進捗状況の報告と手水石奉納に対する感謝の挨拶がなされて総会は無事終了。次いで懇親会に移り、余興を添えて夕刻迄なごやかな懇談が行われた。

空からみた御復興工事状況



この写真は、この程当大社復興事業工事の記録写真として撮られた航空写真である。

これで見ると工事の状況や、進捗の状態が非常によくわかる。

【説明】

○中央の鳥居からずっと下に参道、神門、拝殿、工事中の本殿と続き、その左が同工事小屋。その右上が修理事務所、左上が神饌所修理工事中の現場。

○左下方に見える道が高宮参道

○その左上の白い建物が斎館等の資材小屋、加工場等。その左手が斎館工事中の現場。

○参道右側（神門近く）は手水舎の工事状況。又、参道の左右両側とも池の工事と植栽工事が行なわれ雑然としている尚ずっと右側に斎館と対称に貴賓館が出来る。

○左上は既に完成の祈願殿と駐車場。

神湊（こうのみなと）(11)

楠早鳥作　福田長庵画

宗像大宮司　その一

当時宗像大宮司は宗像三神を奉斎し祭祀に奉仕する神官であるとともに武家社会の一員として領主権と検断権を併せ有する有力な在地領主であった。その家中の構成は、正和二年（一三一三）正月九日宗像社事書によれば「内談」と称する合議機関をもっていたことがわかる。この合議機関はこれより先の建治三年（一二七七）御座次第の末尾にも「社家評定」と記載があるのをみても比較的早い時期から合議によって一社の要務を処理していたと思われる。

この「内談」の構成員は明らかではないが恐らくは大宮司以下一社の有力者からなっていたであろう。内談は一定の式日に公文所に参会して開催し、その決議は全会一致を原則としたが、「衆議ㇾ不同」即ち意見が分れて統一しない場合は「申二合故実之人々一可被二相計一」とあって先例故実に通じた長老の意見によったのである。内談衆評定（会議）の下には、社家の支配機関として、公文所、田所及び検非違所があり、公文所は年貢の配分をはじめとする財政、経済の事務を司どり、検非違所は違法を検察し田所は土地関係の事務を取り扱ったと考えられる。なお全く世俗的な社務には雑掌が当っていた。

これらの事を執務する政庁即ち宗像大宮司館は筑前風土記田島の条に

「田島の境内、本社の南にあり、方百余間、その跡今は田となれり、是大宮司中世より代々の宅地なり」

また興聖寺の条には

「宗像大宮司宅跡今は田となる。ヲヒカシ、ミウチなどという字あり」と書かれており辺津宮境内で本社の南に位し、方百余間であったが近世には田となっていたことがわかる。

館の形状は今日では容易に知る事は困難であるが、住宅の変遷から見れば武家の居館は前代の公家社会の寝殿造から発し、その特徴である左右の対屋が公家の経済力の衰退によって一方の対が略され、寝殿と中門郎のみのものに変っていったが、寝殿造に対する武家造という独特な造形文化を有するには至らなかった。源平盛衰記にも頼朝の邸宅について「京様を学んで屋をば尋常に造られたる物哉」とあるのはこころの消息を伝えているものであろう。頼朝より時代が下って南北朝後期の武家の使用した邸としては「足利御所図」の中にある足利義詮第を見ても寝殿造の略形であるので、規模の大小の差はあれ宗像大宮司の居館も、ほぼこの様なものであったと推測される。

いま、若者は宏壮な大宮司館の中に臥していた。身体の節々の痛みが意識の底をつき起す。閉じられた眼の中では、波濤がしぶきをあげ、許六が天を睨み、舟子等が叫喚している。

若者は呻いた。そしてその声で気をとりもどした。広い部屋の中に紙燭が灯されている。茵の上に起上って、若者はあたりを見廻し自分に与えられた待遇に満足し、大きく息をついた。その時

「お気がつかれたか」

と言って物腰の穏やかそうな武士が部屋に入り若者の前に坐った。

「宗像殿の家臣井上弾正と申す以後お見知りおかれよ、館主に命ぜられ貴公の世話方を委されている、さてー」

と前おきをし、前日来のあらましを語り、許六も無事に娘に会えたことを告げた。

「何くれとない御丁重なお取扱い忝けなく存じます。つきましては訪国の次第とまた船の者一同にかわり宗像殿に御礼を申し上げたい、その分よしなに御取りつぎをー」若者の言葉を聞き弾正は

「いや、その儀については明日は内談衆のお呼びだしがある筈、その折、貴公の来国の趣きを申し述べ謝意を伝えられるがよかろう」

と申しわたし

「まあ、あれだけの働をした故、身体も旧に復してはいまい、ゆっくりと休まれることじゃ、誰かある薬湯をもて！」

と手を鳴らし声高に命じた。衣ずれの音と共に戸が開かれ、化粧の香が若者の鼻腔をくすぐる。

異国の若者が独り数奇な運命の浪のまにまに宗像に漂いついた。月はただ無心に白く館を照らしている。

×　×　×　×

宗像展望

玄海町役場移転きまる

――跡地は大社境内に――

先頃の玄海町議会で玄海町役場庁舎移転が議決された。

移転先は玄海ゴルフ場大池の附近で、玄海町大字江口四八六番地である。庁舎用地としては二万五千平方メートル（七千五百坪）が用意されている。

庁舎は鉄筋二階建で二千平方メートル。総工費一億六千四百万円が見込まれている。このため、鎮国寺下から鐘崎に至る県道の中間地点から道路が建設され、この庁舎を経て、現在建設中の若松、苅屋福間線に連なり、又大社から神湊に至る県道の中間地点から河口を渡って砂山を横切り、この庁舎に至る道路も建設される。

さらにこの庁舎附近の土地は、開発公社から、二億円の融資によって先行投資がなされ、町有地が確保されて中央公民館、公園、遊園地が造成される計画である。

また郡内を流れる釣川の改修工事に江口の五月橋下流が新に編入され、昭和四十六年度から河口土砂の堆積を防止するため、海中へ防波堤が六十メートル突出することになった。将来は二百メートルに延長される予定とのことで総工費二億五千萬円、本年度は約三千萬円で工事が開始される。

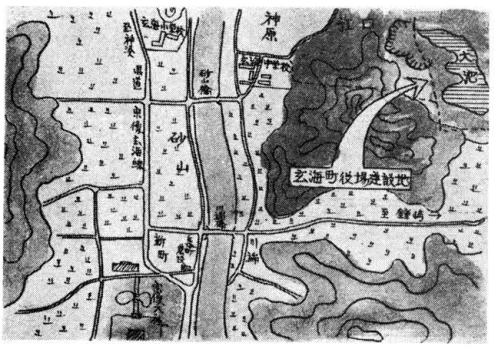
この工事によって、釣川河口一帯の海域で海苔養殖が可能となり、釣場としても有望視されている。

この河口左側海浜一帯十六ヘクタールの松林は、青年研修センター建設予定用地にあてられている。

国立青年の家は、九州では唯一の阿蘇、福岡の英彦山にあるが、海浜にないので、玄海町がその候補地にあげられている。

玄海町庁舎移転に伴い、今後の発展が予想される江口方面が注目されよう。

役場移転後の跡地は、宗像天社境内となり、往古の山縁に因み公園が復元される予定である。



玄海町役場建設位置図

話題の新車をみる (四六)

スズキフロンテ71の巻

「世界の名車」となる。我が国でなじみ深いYS11型機エンジンもそうである。

航空機エンジンの製造販売であろう。その世界の名車の生産会社が倒産して終ったのである。ロールス・ロイスこの会社の倒産の原因となるのが米国ロッキード社と契約したエアバス用エンジンRB211型の第一回納入分百五十台についての五〇%以上を占める業務は大型の欠損である。総額4800万ポンドの倒産である。かくて67年の歴史を誇るロールス・ロイス社は好調の自動車部門を売りに出し、国有更生会社として再出発しようと云うのである。正に自動車部門に取っては、「歩行中に飛行機が墜落して来た」とも云うべき倒産である。さて新車の紹介に移ろう。今回はスズキ、フロンテ。全面的モデル、チェンジは昭和四十二年五月以来三年半振りである。今回のモデルの特徴は低く広く、鋭くと云う事で「ステインレス・ルック」と云う深海魚のグレイ・ルック」と云う深海魚の名前をつけてこのスタイルを強調している。そのせいか「サメ」の様なスタイルで、軽では一番低い。この低さによって、その相乗効果として幅を広く見せている。軽自動車と云うも、幅より高さのほうが大きいのが普通である。これは日本国内に於ける道路の悪さ等に起因するのであろうが、その常識を始めて破ったのがホンダZであり、次にこのフロンテ71である。今迄のフロンテの泣き所と云えばトランクの無い事であろう。今回の71はこれが解決された。ミニカ70、フェロー MAXどれを見ても、フロントグリルはまったく同じ様な型をしている。エンジンその他は出プロパーとなる。ロイスエンジンの製造販売である。

郡内五ヶ町村の昨今

〝期待される四十六年〟

昭和四十五年度を了え次年度を迎えんとする宗像郡各町村ともあわただしい動きを見せている。

四十五年度は我が国のめざましい経済成長に反映され、当郡内にあっても著しい変望をみせ、開発と発展の痕跡を各所にとどめた。

その第一にあげられるのが団地造成である。周知の通り当郡は県内の主要都市である北九州市と福岡市内とを結ぶメインルートの真只中にあって、水清き海河と、緑豊かな山野という風光明媚の立地条件を有している。

当年度に造成された二、三の団地のほか、既成団地も待せて十指にのぼる団地ができたが、まだ造成と整備が急がれている現況である。

また、人口の増加に伴い、教育施設の拡張、改築、合併教育環境の整備が急がれ、一方、道路の拡充、レジャー産業の開発促進、農漁業の改善、開発等もなされ、次年度以降の開発にも着手されている。その概ねをみると、宗像町では森林都市、自由ケ丘、日の里団地等の大団地を始め多くの小団地が造成されただけに、ダム建設がなされ郡内外に大いなる関心をもたらした。加えて森林都市、日の里団地には跨線人道橋を設け、一層の配慮がなされる等めざましいものがあった。一方教育環境整備としても、宗高の改築、中央中学校の体育館建設がなされたが、各団地の幼稚園小学校の計画推進もしくはその周辺学校の拡充整備等が今後の問題として取組まれている。また昨年末に完成の宗像バイパスへの支線道路拡充もなされ大いに期待されるところである。

福間町ではやはり東福間団地を始め多くの団地が造成されただけに環境整備、教育問題等に特に力をいれ、善処されている。

今後の問題として、居住者の増加に伴う水不足等が考えられる為ダムを建設してまかなわねばならないが、それには、いっそう団地を誘致して一挙に解決する余地もあるところから、この面の推進が当局スタッフでなされている。

また、レジャー産業誘致にもとりくみ、その手始めとして福岡厚生年金スポーツセンターが四十六年には完成する予定で着手されている。同センターは全国で第三番目に建設される大総合スポーツセンターで、敷地面積五万坪、本館、プールハウス、体育館、テニスコート、サッカー場、野球場をもち日本二完備されたスポーツとリクレーションの総合施設として県民に開放されるという。

又津屋崎町でも四十六年に武道館が同町中学校々地内に建設される予定であり、更に四十七年には中央公民館が建設される予定である。

宮田町では無理とされていた団地を昨年誘致造成したが、大成功をおさめている。一方レジャー産業の開発として海水浴場等の目ざましい発展をみたが、加えて温泉センター式の総合レジャーセンターの開発等も考慮されており、次年度以降が大いに期待される。

更に当地では有力産業である農業には特に地道な努力を加え、ビニールハウスによる電照菊、イチゴ、野菜等の栽培は急速なる進歩をみせ、大いなる成果をみせている。

玄海町に於いても先の玄海小学校につづく、鐘崎、池野小学校の統合校舎新築が着手され、各校に幼稚園を設置する等、教育郡宗像の面目躍如たるものがあった。

又前記の町営移転決定とそれに伴う環境整備は町発展へのワンステップとして注目される。更に漁業では鐘崎に大冷凍冷蔵庫設置工事が着手され、工事が急ピッチで進められているが、これも市場のみに依存した漁業から、自主的な新しい漁業へと生れかわる第一歩として注目されている。

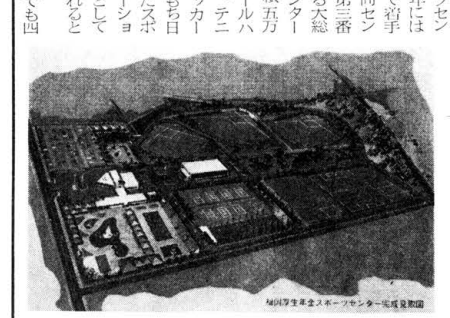
大島村では昨年四月、国会に於て「過疎地域対策緊急措置法」が立法化し、大島村にも適用される事となったが、離島振興法の期限切れに引続く過疎法の施行は正に旱天の慈雨であった。村当局では直ちに、大島村開発五ケ年計画に取組み、予算総額三億円で次の進行企画がなされ、既に一部は着工されている。

1、消防施設整備、簡易水道事業。
2、離島振興地開発事業。
3、道路整備、観光施設の設置開発。
4、屠畜処理場設置。
5、小中学校改築工事。

以上、大島村は過疎防止と明日の発展のためにその第一歩を踏み出したが、この事業の完成には、村当局の努力は勿論、村民の理解と協力が必要な事は云うまでもない。

かって全国唯一の敬神模範村として表彰された事を回顧し、神人和和、共々に繁栄する村作りを期待したい。このように各方面に大いなる進展をみせ、今後の大いなる飛躍が期待される宗像の昨今であり、願わくば、福岡の大公園として人の和が育まれる神郡宗像の伝統がいかされんことを。

（写真は、スポーツセンター完成見取図）



神郡宗像

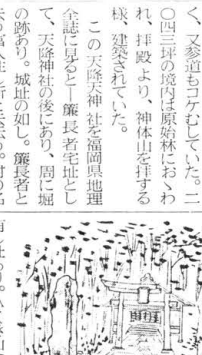
摂末社を訪ねて (六)

須多田神社

津屋崎町大字須多田字上ノ口に鎮まります、須多田神社をたずねて見た。この神社は、前方後円墳の後円の部分を神体山として奏祭している社である。

これを明細帳に見ると一須多田神社は津屋崎町大字須多田字上ノ口鎮座、祭神、神直日命。これ往昔の須多田明神である。津屋崎町大字須多田鎮座の天隆天神社（アモリ）をもって本社に充てる―と記している。

又、真間国統風土記の須多田の条には、此地に宮山あり、廻りに堀二重をほりまわし、四方に門を



たずね見た天隆天神社は、鳥居の額字も風雨にさらされて定かでなく、又参道もコケむしていた。二〇四三坪の境内は原始林におおわれ、拝殿より、神体山を拝する様、建築されていた。

この天隆天神社を福岡県地理全誌に見ると一簾長者宅址として、天隆神社の後にあり、周に堀の跡あり。城址の如し。簾長者と云う富人住し所と云伝う。村の名を須多田と云も、此より転ずるなりと記している。

又、簾長者の往古をしのぶ遺物であろうか、もの云わぬコケむした庭石には何も知るすべもない。

しずかな境内に、毎月榊と水を取り替え、一日と十五日にはお供え物を捧げる里人達が今も絶えないこの社こそ、現世に見る産神のお社、と云ってよい。

社をたずね聞いて、這案内をして下さった名も知らぬ里人にも、素朴な親り味があふれていた。

其故に村の名をも簾田と云うにや。これより転じて須多田と云うなり―と記している。現在も、神体山周囲には堀のあとらしきものが見られ、又鳥居周辺に散乱する庭石等も、神社に関係ないものと思われる石類が多い。これも、簾長者の往古をしのぶ遺物であろう。

宗像伝説　其の一〇八

陸軍少将 〝五十君弘太郎〟

宗像郡赤間村の悪戯の餓鬼大将をつとめ、其の名も高かった弘太郎が十六才になった明治三年弥生の頃である。「さあ、弘太郎も元服を祝って一人前の男になったのだ、これから東京に出り、医者にでも商人にでも好きな道に身を立てよ」

八歳の時、相次いで父母を失った弘太郎を親に代って育てくれた伯父より、こう言い渡されて、金子六十円（当時米一俵二円）を懐に、四ツ塚連山をあとに上京した。当時、東京で開業医をして居た伯父武谷祐之をたよっての上京ではあったが、懐中の六十円では医者になるには全位の金子ではどうにもならない。又、家を出る時伯父より、「あとは一文の仕送り も出来ないぞ」と云われた言葉を肝に銘じ、始終その言葉を思おこす弘太郎であった。己れの進むべき道を懸命に探す折、陸軍教導団員募集の札が心と弘太郎の心に触れた。これこそ、のちの陸軍少将五十君弘太郎閣下の抑々のめぐりあわせであった。

明治十年、彼が陸軍伍長に任ぜられた時、薩南の空に風雲急を告げて、西南の役は勃発した。「まあ、五十君伍長殿、あなたはこんな仕事をして居られますか」炊事係の彼を見て、ふと声をかけたのは、赤間出身の一兵士である振り飯の世話係り、伍長の彼の胸を鋭く刺したこの一言、手中の握り飯は形なくくずれ、手がふるふるとふるえた。決然として南をくいしばった彼は、「よし、さらば！」一人心中に何か誓うのであった。

かくて明治十六年、彼が士官学校に入学してからは、其の勉学と共に進級著しく、日清の役を経て、明治三十五年、元帥陸軍大将小松宮彰仁親王殿下御附武官として、英国皇帝の戴冠式に陪列する。

季節はずれの落葉が三、四枚、小猫のように走りぬけた。

大正二年八月、族団長として再び九州の土地をあとに、仙台赴任した彼は、同五年現役を辞し、東京に悠々自適の日を過ごしたが、自宅を訪ねる人々はあとをたたなかったと云われる。

大正八年九月二十五日小雨降る朝、六十歳を以って、皋の人となったのである。

不運と辛苦の中に生立ちながら、勇躍功成り名遂げた彼、従四位勲三等功四級陸軍少将五十君弘太郎閣下、――軍人の鏡と云われた五十君少将の話しになると、聞く人すべて、エリを正し、黙想したと、今の世に語りつがれている。

春まつり御案内

本年も左記日程で、当社春季大祭を斎行致しますので、皆様お誘い合せの上御参拝下さいます様御案内申し上げます。

記

三月三十一日午後五時　高宮祭
午後六時　総社宵宮祭
四月一日午前十時　大祭
（氏子奉幣、奉納謡）
四月二日午前十時　大祭
午前十一時宗像護国神社大祭
（其の他奉納剣道大会等神賑行事が行われます）

【御案内】

当社では来る三月二十七日から二十九日まで新入学児童の交通安全・学業祈願祭を斎行致しますので御案内申し上げます。

尚受付は随時致します

東京出光会参拝

去る二月十日、東京出光会の会員四十名が当社に参拝した。一行はまず仮殿から高宮に詣で、この後、復興事業の中心である本殿修復の模様や、境内諸建物の新築状況について職員から詳しい説明を受けた。

宗像大社歌会 俳句作品集 (九十九)

田熊　小野角次郎
春日さす朝の散歩に露光る

田熊　小野　花居
遠山に語りかけたき今朝の雪

大井　安部　重郎
初たよりみちのくの冬こまごまと

東郷　有吉　春子
春の客潮退く如く去られけり

平等寺　中野　きみ
日々楽し四温の籔の茸もち椙

津屋崎　井浦　良介
妻不在雪がつぶやく子の寝息

武丸　野中　和子
朝夕の立居にぶりて風邪永びく

福岡　入江　柳江
主出て見せし自慢の寒椿

福岡　麻生　初栄
名残り雪山を被ひて冬陽照る

大井　木原　ふさ子
冬ざれし小庭辺親し初句会

大井　吉田　ますみ
日脚伸ぶうから寄り合ふ一日かな

久留米　篠田太郎坊
先代よりの炉ぼりの家に往診す

門司　永島　哲夫
餅がよくふくれ今宵の泊り客

宗像　安部さつき
背のびしてみくじ結びぬ初詣

小倉　伊豆　湧泉
一年の計樹てしより初詣

出光佐三一問一答シーリズ ㊺
働く人の資本主義

たとえば、私は金持の金は借りずに、銀行の金を使ってきたが、安易な道を選ぶならば、株式で資金を募集していますよ。そうすれば金はらくらくと出来て金の苦労はしなかったでしょうね。そのかわり金の力で左右されて、人間尊重の主義なんか絶対に貫き通せなかったと思います。

それから戦時中は、軍の言っとおりにしておけば楽なのに、法律・組織の奴隷となるな、人間の真に働く姿をあらわして国家社会に示唆を与える、などということを言って、軍とまっこうから対立している。

また戦後は、カルテルに屈伏してやっておれば安易な道を歩けたのに、「日本の石油業をカルテルに独占させるな」と言って、みずからの非力をもかえりみず敢然と戦っている。私がいなかったら日本の石油業界はどうなっていただろうかと思いますと、慄然としますよ。おそらく毎年五〇〇億円から一、〇〇〇億円の搾取をされていたと思いますよ。

質問　出光さんの人づくりのためには鍛えなければならん、ということはよくわかります。と同時に、物を生産するような場合、最少の労力をもって最大の生産をあげるように、能率的に合理的にやらなければならないことは当然だと思います。問題は国家なり企業なりが、なにかやるときに物質的な成果ばかりをねらうか、人間をつくるというような本質的なことを最終目標にするかということですね。

出光　そうです。同じ人間尊重でも、いまの政府や政治家の言っている人間尊重は、物を与えてらくらくと暮らせるという物の福祉中心の人間尊重です。享楽や物の福祉を尊重する人間尊重です。私のはそうじゃない。物は窮屈でもいい、人間の尊厳を尊重するような人をつくることが目的です。その尊厳とはお互いに仲よくすること、和の人間ということです。

質問　そのあたりが、一般の考え方とぜんぜん違っておりますね。企業活動というものは経済効果と不可分でしょうが、出光さんの場合はたえず人を育てることに重点をおいておられるのですね。

出光　いまは、出光が敵のまっただ中に一人いるような形で孤軍奮闘しているから、若い連中が店主ばかりに苦労させてはいかんおれたちもいっしょにやろうという気分になっている。この団結は強いですよ。出光がなにか圧迫されるようなことがおこったときにいつも出てくる社員たちの言葉は「終戦のときのタンク底時代に帰りましょう」ということなんです。あのときの耐乏生活はそれはひどいものでしたよ。あの耐乏生活の体験をもっているから、いざというときはあれに帰ればいいという度胸がすわっていますね。

そういうふうに、いつも私が先頭に立って苦難の道を歩き、社員は鍛えられていますので、自発的にわれわれがやらなきゃならんという自覚が出るんですね。かりに出光に役所の人を入れると、役所との折衝はうまくいくでしょう。また銀行の人を入れれば、金融は楽になるでしょう。しかし下のほうはのんびりしてしまって駄目になりますよ。私はいま、どんな難関がきたってビクともしません。いままでにあらゆる難関を突破してきているから。

質問　最近の若い人の教育はぜんぜん逆ですね。坊ちゃんでも夏目漱石の坊ちゃんならいいけれども、道楽息子の坊ちゃんみたいになっている。楽をすることばかり考えている。それだから非常に弱い。

出光　鍛えあげなければいけません。私の子供でもよくわかりますが、私の子供はぜいたくはしません。息子も娘もふしぎに金を使いませんよ。使わないから金をくれとはいわないが、金を屁とも思っておりませんよ。(笑) らくらく生活していくことはあたりまえと思っていますね。私の子供は生活の苦労を知る機会がない点は不幸です。

質問　逆に、あまり貧乏しても金にとらわれるようになる。

出光　愛情で素直に育てることが根本でしょう。そして鍛えあげるんですね。

質問　出光さんが「最少の労力、最大の効果」の法則をとらないといわれるとき、人づくりが目標とされていることを知っておく必要がある。しかしこういう言い方もできるのではないですか。鍛えあげられた人間ができあがっているとすれば、その人たちは合理的にやって最少の労力で最大の効果をあげることができる。

出光　そうです。艱難に耐え、鍛えられて人間ができると、自然に最少の労力をもって、自力で最大の効果をあげるようになる。これがいちばん理想ですね。

質問　ところで、出光さんのそういう指導が一万人の出光の従業員、販売店の若い人もいれると四、五万の人びとにどうして浸透してゆくのかこれがふしぎですね

出光　年月でしょうね。実は私も店を開いてから十年たったころ、こういう行き方は立派なことだけれども、いったい何人ぐらいまで広がりうるだろうかと考えたことがあります。そのときは店員が四、五十人しかいませんでしたが、なんとなく三百人ぐらいまでいけそうだと思ったことを覚えておりますよ。いまはもう制限はないと思いますね。

質問　これだけの人数になりますとみなが出光さんと直接、接して膚であなたの人格なり思想なりを感じとることはできないと思いますが、そのへんをどういうふうにやっておられますか。

出光　私が戦前に直接育てたのが二百五、六十人いるんですがそういう連中が、新しく入ってくる人びとを身をもって率いてきたんですね。ところがもう最近では戦後派が立派に育って、出張所の主任なんか戦後派ばかりです。支店長のポストもだんだん戦後の新しい人になってきている。戦後派が立派に身をもって率いていますから、もう間違いはないですね。

質問　出光さんの分身みたいな人が、各地にちらばっているということですね。

出光　そうです。しかし支店長や主任が、なにかやかましく言って指導したりしているかというと、そうではないんです。ただ身をもって率いているだけです。私がやっているようなこと、あるいはそれ以上のことをやっている支店長もいますよ。そういうのをみて、いまの若い人は心の福祉を感じるんじゃないですか。私のところの若い人は、私もふしぎに思うくらい愉快にやっていますよ。

質問　そうすると、上に立つ人のあり方が非常に大切になってくるわけですが、どういう基準で選ぶんですか。

出光　本人主義です。トコロテン主義じゃありません。学歴は関係ないですね。それだから丁稚からあがってきた重役もおれば支店長もおります。いまの支店長は昔の高等商業出と普通商業出がほとんどで、大学出はいないんじゃないかな。役所のような何大学はどこまで、何学校はここまでというような、人間を馬鹿にしたことはやりませんよ。出光は人間のあり方を尊重しているわけです。

私はよく支店や出張所をまわって、今年入ったような若い人まで全部集めて、すき焼きを食ったりするんです。そしていろいろ座談していると、みながどういう感じで働いているかよくわかります。それがいいんですね。ところが本社、東京では、かえって灯台もと暗しでほとんど話す機会がないので困っているんですよ。

質問　そういうトップと第一線の若い社員との対話が、一般の会社には欠けているんじゃないでしょうか。

出光　欠けていますね。経営者に親切味がないということじゃないですか。ちょうど学校がそうです。昔は先生が人格で指導していましたが、いまは学問の切り売りをしているのと同じです。

(つづく)

沖ノ島 1

宗像大社沖津宮祭祀遺跡 昭和四十四年度調査概報

序

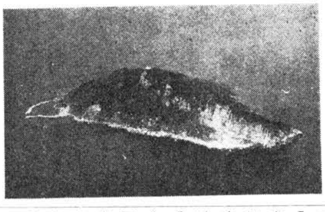
宗像大社の御祭神であります宗像三女神は記紀にあります如く天照大神の御子神でありまして、大神の御神勅を奉じて天孫降臨に先立ってこの宗像の地に天降り、天孫の肇国の偉業をお助けし、皇室をお護りして平和な国を築き、その安泰を守護するという国民道の鑑を示されて宗像に鎮座し、世々皇室をはじめ全国民の篤い尊崇を受けてこられました。

このことは、日本書紀より三代実録に至る六部の国史書、その他の歴史書の各所に宗像大神勅祭の記載があり、又京都御所内に延暦一四年頃に皇居鎮護の神として宗像大社が祀られ、今日全国津々浦々の六千二百余の神社に宗像大神が奉祀されていることからも明かであります。

その総本社であります宗像大社は福岡県宗像郡玄海町田島の辺津宮、海上十一粁にある大島の中津宮、六〇粁沖にある沖ノ島の沖津宮の三社からなる規模雄大なお社であります。

本期成会はかねてより、この宗像大社の御復興の一事業として社史の編纂を進めておりますが、昭和二十九年五月沖津宮の調査の必要を感じましたので、玄界灘の神島として古来深い崇敬と信仰を受けております沖ノ島に学術調査団を派遣いたしました。その折、はからずも千古不伐の森厳なたたずまいの沖津宮周辺の巨岩地域に古代祭祀遺跡群が発見され、爾来昭和三十三年九月までに第一次、第二次合わせて五回にわたり調査を実施いたしましたところ、この遺跡群は出土した厖大な量の豪華な祭祀遺品と出土の様子よりして四～六世紀に大和朝廷によって国家安泰の祈願をこめて、国をあげて営まれた大祭祀遺跡と判断されました。

(中略)



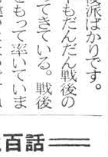
本会といたしましては、この遺跡を精査して悠久の古より世々朝野をあげて宗像大神をお祀りした姿とその心を把握し、わが国体の精華であります神と皇室と国民の三位一体の深遠な往古の歴史を明らかにし、以て宗像大神の御神徳を宣揚甲し上げることにこそ大社御復興の真の意義があると存じます。しかしながら、この調査は遺跡の規模の雄大さと意義の重要なることを考えますと、一復興期成会の事業の範囲を超えた、まさに国家的大事業でありますので、今後一層の努力をはらって慎重な調査を継続実施する所存であります卒関係各位には変らぬ御指導御協力の程お願い申し上げます。

(中略) 各回の調査の内容はその都度概報を作成することとし、今般昭和四十四年四・五月の予備調査及び十月の第一回調査の概報を作成いたしましたので御高覧賜りたく存じます。

昭和四十五年八月一日

宗像大社復興期成会
会長　出光佐三

──宗像藪庵先生百話──
南方 華やかなりし頃



宗像太郎坊

猿と酒　つづき

五杯まで息もつかずに飲む。毎日、酒量を増して、十杯まで許すことにした。おかげで猿の躰の調子は良くなり肥ってきた、と書いてある。

このように猿は生れつき酒が好きであるので、何かの機会に酒を造ることを覚えることもあり得る。

清水精一という人が今から約五五年前に人の歩むべき道についての苦悩を解決するため、丹波の山中で三カ年修業していたことがあるが、この辺りは非常に多く猿が棲んでいて、彼等と非常に仲良くなり、小屋で火を焚いていると二、三〇匹の猿が入って来て、一緒に火に当る程になっていた。或時、中の一匹が清水氏の手を取って引っ張るので、ついて行くと、雨の当らない岩陰の所に案内された。猿は岩の凹みに置いてある広い草の葉を慎重に取り除いた。するとそこに何か液体が溜っていた。仲間の猿はその液体に顔をよせて口でちゅーッと吸ってみせた。

「なんともいえぬ良い酒の薫りがして来たので、私はとっさにこれが話に聞いた猿酒だなと思いました。色は薄黄色で澄んでいて綺麗でした。私は矢も楯もたまらず両手で一掬いすくって飲みました。たまらなくうまい酒でもう一杯と思って手を出すと、友達の猿が歯をむいて怒るのです。手でなく口で吸えというのです。私はたらふく吸って久し振りに楽しい人間に返ったのです」と清水氏は語った。

また或人がどのようにして猿が酒を造るのかと訊いたら、清水氏は「丹波の猿が集団で酒を造る時には、人間の世界でいう酒造業の杜氏に当る猿がいました。集団のボスとは異う猿です。それが命令するのです。先ずてんでに口一杯にどんぐりを咬み砕き、雨の当らない岩陰の凹みに吐き出す。二、三百匹の集団の猿がやるので見るみる内に一杯になります。すると杜氏の猿は全員に何やら合図をすると、全員が谷間におりて口一杯に清水を含んで来て、それを咬んだどんぐりを入れた凹みの上に吐き出します。それが終ると杜氏の猿は、最初は一日に十回も掻き廻したが、それも木の枝でやるので手を絶対に入れません。撹拌が終ると何枚もの広い葉を置いて蓋をするのです。日がたつにつれて撹拌の回数を減してゆきました。そして十日もすると掻き回さなくなります。私は時々その酒蔵を見に行ったのですが、日がたつにつれて酒の薫りがだんだん強くなって来るのに気がつきました」と語った。

養老の滝もこのようにして出来た猿酒が流れているのではないかという説がある。

別府で「高崎山の猿酒」というのを造って、昭和三七年八月二三日発表、高崎山のえて公にも一杯ずつ献じて一斉に発売された。果実・味淋等を原料にして造ったものらしく、味は奥山の猿酒に似せてあるといい、第一、精力がつくのが特徴とされている。小鹿田(おんだ)、小石原焼などに入れたのだが〇・八リットルが百～三百円である。この酒だけを専門に売っている店の入口にある猿酒の由来記には、猿酒とは野猿が木の実を木の節穴や岩の凹みに貯えたのが自然に醗酵して酒になったもので、大友興廃記によると安土桃山時代の英雄大友宗麟の治世、府内(大分)の貧しい酒行商人中尾玄通に救われた高崎山の猿が、恩返しに猿酒のありかを教えたため玄通は多くの人にこれを分ち与えて大いに喜ばれたといわれている。「高崎山の猿酒」はこの由緒ある伝説に因んで醸造したものでその独特の風味は真に天の美禄というにふさわしく、精力を増進し健康を保持する一大強壮の霊酒であると書かれている。

(つづく)

〔読者から〕

編集部に、ある日ある若いお嬢さんの書いた文章が寄せられた。読んでいるうちに大へん興味深いものであったので、ある若者の記録として掲載いたします。

〝ある韓国青年との出合いで〟

私はふとした事で思いがけない人と話をする事が出来た。彼は一見すると、まるで日本人のようであったが、彼の話で韓国人である事がわかった。つまり私からすると外国人なのである。外国人……それだけで私は言葉も習慣も全く異なる人と言葉をかわすのに非常な興味を覚えたのである。

彼は三ケ月間の勉強で日本語をマスターしたそうであったが、いやいや〝ピンクムード〟等という言葉まで知っていたくらいだからなかなか大したものである。その彼の感想だと現代の日本の若い人達は余りにも夢がなさすぎるという事だった。果してほんとうに夢がないのかどうかは疑問だとしても、あの軍国的な体制の中できびしく育まれた若者がみるに、およそ現代日本の若者が、ロングヘヤーにロングコートをまとい、二人仲良く腕を組んで街を歩いている自由な姿は、さも今の今だけを楽しんでいるかのように、見受けられるのかもしれない。

今までの日本にはなかったヒッピー族などという人達を見た時、それが良い悪いは別としても、私自身何か現代のうわついた(?)日本から無理に逃避しているような気がしてならないし、又反対に自分のやりたい事をだれにも束縛されないで猛進する姿は、又若者ならではのような気もしないではない。

しかしこの逃避?の姿をもつ若者がもっと大きく未来をになう若者として、もう一つの方向にもはばたいたなら、若者はもっともっと大きく前進するような気がするのである。

私は一韓国人とのパプニングな出合いと、会話の中に、今まで気にも止めなかったことや若者を、また自分をみつめ直す事ができたような気がした。

現在を楽しむのが若者の特権であるのかもしれないが、私はその韓国の人の感想をきいて〝なるほど〟と思わずにはいられない気がした。

最後にその彼にとって一番悲しく残念な事は、愛する自分の国がはっきりと二つに別れているという事だ、といった言葉が、私の胸に強くひびいてはなれなかった。